


## 平日午後は「シブヤ未来科」、塾と連携し研修…探究学習に自治体が力

有料記事 まなviva!

塩入彩 2024年6月15日 10時00分



渋谷区立神宮前小学校の3年生の「シブヤ未来科」の授業。この日はプレゼンテーションソフトの使い方を学んでいた=2024年6月11日、東京都渋谷区、塩入彩撮影 

子どもたちに「正解」のない時代を生き抜く力を身につけてもらおうと、探究学習に力を入れる自治体が増えている。どのような学びや取り組みなのか。現場を訪ねた。(塩入彩)

【まなviva!】(まなび場)



幼い子から人生のベテランまで。「学ぶ」をとりまく喜怒哀楽や最新事情を伝えます。



「海のエコラベル 知って選ぼう おいしい魚を守るため」**「あった！」**

6月中旬の午後、東京都渋谷区立神宮前小学校。6年生の教室で、子どもたちが絵札を勢いよく取り合っていた。SDGs(国連の持続可能な開発目標)をテーマにしたカルタで、遊びながら、それぞれ興味のある開発目標を探す活動だ。

同じ時間帯、3年生のクラスでは、子どもたちがプレゼンテーションソフトの使い方を学んでいた。先生が見本のスライドを画面に表示し、「これと全く同じものをつくってみて」。まずは「ノーヒント」で、子どもたちは試行錯誤しながらイラストの挿入などに挑戦した。

同区では今年度から、区立小中学校の主に平日午後の授業を「シブヤ未来科」と位置づけ、探究的な学びにあてる時間を充実させた。核となるのは、「子どもの生きる力を育む」として、1998年改訂の学習指導要領で創設された「総合的な学習の時間」だ。区では文科省の特例校制度を活用し、国語や算数などの授業時数の一部を総合的な学習の時間に上乗せし、従来の年約70時間から約150時間に拡充した。

## 1年を3分割 基礎を身につけ、掘り下げる

1年間を大きく3分割し、まずは「探究基礎」として、情報収集や発表方法などを学びつつ、地域や企業と連携した体験活動を行う。次に、学級や学年で共通の問いを立てる「テーマ探究」を行い、最後に「My探究」として、各自の関心に応じた学びを深めていく。

同小の加藤康弘校長によると、これまでもテーマ探究はあったが、探究スキルの習得や各自のテーマを掘り下げるまでの時間を確保できず「困っていた」という。しかし、今年度からは「しっかり基礎を身につけた上で、実践的な探究に取り組める」と期待する。協力企業の仲介など、地域や保護者、区教育委員会のサポートも、学校側の負担軽減につながっているという。

総合的な学習の時間がない1～2年生も、生活科の授業などをシブヤ未来科にあてる。植物や野菜を育てる際は、観察や考える時間を増やすなど、より身の回りの自然や社会の様子への気付きや体験を重視した授業づくりを心がけているという。加藤校長は「『この時間は探究的な学びを行う時間だ』と教員が意識するようになったことが大きい」と話す。

## 塾と連携、「公務」で研修

東京都三鷹市では2022年度から、市内にある探究の専門塾「探究学舎」と連携協定を結び、子どもたちが自ら進んで学ぶ「探究的な学び」ができる授業づくりのための共同研究を始めた。

昨年度までは年間約30～40人、今年度は人数を絞り、約10人の小中学校の教員が参加。月1～2回集まり、児童生徒の立場になって探究学舎の模擬授業を受け、スキルを学ぶ。秋以降は、年明けの成果発表会に向け、各自が授業づくりをする。

開始当初は、それぞれの教員の興味関心に沿ったテーマを選んで研究していたが、昨年度からは、各教科にどのように探究的な学びを落とし込めるかを意識した授業づくりをしているという。

共同研究への参加は「公務」扱いで、勤務時間内に開かれる。探究学舎の講師で、共同研究プロジェクトリーダーの森田太郎さんは、「忙しい学校の先生にとって、民間企業との交流はハードルが高い。市教委が公務扱いにしてくれたのは大きかった」と話す。

森田さん自身、13年間公立小の教員だった経験があり、現在も講師として市内の小学校の教壇に立つ。「探究学習という言葉は広まったが、専門的に取り組む先生が各学校にいないと、形骸化してしまう。学校に求められる役割はどんどん増えており、民間と交流してアップデートしていくとともに、先生の仕事量や役割を整理し、先生が学べる環境を整える必要がある」と語る。

探究学舎代表の宝槻泰伸さんも「全ての子どもたちに機会を提供する場として、学校が果たす役割は大きい。外部からの刺激が学校現場への新しい風となってくれれば」と話す。

連携3年目となり、市教委教育施策担当課長の齋藤将之さんは「授業での学習が社会とどのようにつながっているのか。身近な話題と絡め、児童生徒が実感できるよう心がける教員が増えてきた。1コマの授業構成だけではなく、単元全体でどう学ぶかをデザインする意識も強くなってきている」と手応えを語る。

市教委では、成果発表会での模擬授業の動画を、市内の教員がアクセスできるオンラインアーカイブに保存。より多くの教員が、共同研究の成果を授業に生かせるようにしていくという。

## 探究学習の意義と課題 識者に聞く

現在の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が重視され、高校では22年度から「総合的な探究の時間」が必修科目となり、小中学校でも探究的な学びが求められている。探究学習の意義や課題について、千葉大学の小山義徳准教授(教育心理学)に話を聞いた。



探究学習とは、児童生徒が自ら課題を設定し、探究していく学びのことで、一般的には「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ・発表」のステップを踏みます。児童生徒が大人になった未来の予測が困難であるため、知識量を評価する教育から、知識を活用して新しい考えを生み出すことを評価する教育への転換が求められています。

探究学習は、授業で学ぶ内容と社会のつながりに気づききっかけになります。例えば、水道水や川の水質について探究することで、理科の授業で習った知識が実生活と関連していることに気づく可能性があります。また、探究学習の過程で、情報収集スキルや批判的思考が育っていくことも期待できます。

教師にとっても、教師が一方向的に説明する授業から、児童生徒が調べて考える活動が多い授業へ変化するきっかけになると思います。

ただ、注意点もあります。探究学習は土台となる基礎知識の習得と、両輪で進めていくことが重要です。例えば環境問題について問いを立てる場合、基礎知識がなければ、インターネットで少し調べればわかるような浅い問いしか立てられず、探究の内容が深まりません。逆に、数学の知識があれば、世界の二酸化炭素の排出量から20年後の気温の予想に関心が向くかもしれませんし、英語ができれば、海外の文献も読もうと思う生徒も出てくる可能性があります。そのた

め、質の高い探究をしていくには、土台となる教科の基礎知識を児童生徒が習得していることが重要になります。特に小中学生は、基礎知識の習得と探究とのバランスが大事です。

教員の養成も急務です。40代以上の多くの教員は小中学生の時に探究学習をした経験がありません。探究の授業の進め方に不安がある方には、研修などで学ぶ機会を設けてサポートすることが必要です。

(まなviva!)

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.